

PCC NEWS & LETTER

日本赤十字社医療センター緩和ケアカンファレンス

vol.04 2018.10



2018年9月12日第143回PCC開催

地域の緩和ケア紹介

今回は、当医療センターの緩和ケア科、緩和ケア病棟の特徴や日々のケアについて、伊藤哲也先生と、緩和ケア病棟副師長 斎藤まゆみさんから紹介いただきました。

緩和ケア病棟では多職種でカンファレンスを行い、患者1人1人のケアについて多角的な目線から考え、多様なケースに対応しています。亡くなった患者さんのご家族へのお手紙の送付や、遺族会の開催など、グリーフケアにも力を入れています。

また、春は桜、晴れた日は富士山が見えるなど、病棟からのロケーションも自慢できるポイントだそうです。



当医療センターの緩和ケア病棟について地域の連携先の皆様にお知らせする、貴重な機会となりました。

PCU便り



【夏祭り】

8月末、毎年恒例の夏祭りを開催しました。患者家族、ボランティアの皆様の協力を得ながら、緩和ケア病棟で縁日を開きました。皆でかき氷を食べたり、お子様はヨーヨー釣りやすいか割りに参加したり、とても賑わいました。



ご講演前の内藤いづみ先生（左）緩和ケア科 竹井副部長



ふじ内科クリニック 内藤いづみ先生
今回の教育講演では、在宅ホスピスケアの黎明期から活躍されている内藤先生の人生と、在宅ホスピスの歴史についてお話いただきました。
先生が医師になった頃は、がん患者は病名の告知はされず、最期をどう過ごすかも自分で決めることができない時代でした。そんな中、先生は末期がん患者と出会い、「家に帰りたい」という願いを叶えるためにボランティアで往診し、家族とともに在宅療養を支えられました。
その後、イギリスでホスピス運動を学び、ムーブメントを起してこられた方々とも直接交流を深められ、帰国後、甲府で開業されました。

現在のようには、法律や制度が整っていない時代から、在宅ホスピス医として活動できたのは、患者・家族の強い思いと、多職種との協働があったからこそと話されました。
今やがん患者が、住み慣れた自宅を最期の療養場所として選ぶことが、珍しくなくなりまして。このような時代を迎えることができたのは、先生方が先駆者として在宅ホスピスの道を切り拓いてくれたからだ実感しました。
ご講演は、ユーモアにあふれた語り口で多くの患者・家族が寛ぐ様子を目の当たりにし、時間を忘れて聞き入りました。ホスピスケアへの思いを新たにすることができました。

第144回緩和ケアカンファレンス

2018年11月14日 19:00～20:45開催予定

第144回PCC教育講演は「東京都におけるがん対策について～東京都がん対策推進計画」東京都福祉保健局医療政策部医療政策課 計画推進担当課長 千葉清隆先生にご講演いただきます。

2025年問題を前に、緩和ケアを取り巻く状況も大きく変わっていくことが予想されます。東京都の政策方針を直接伺える貴重な機会です。

なお、この会は、日本医師会生涯教育カリキュラムと緩和薬物療法認定薬剤師単位の取得対象になります。ふるってご参加ください。

編集後記

PCC News Letter 第4号をお届けします。ご講演で、『架け橋としての緩和ケア』の紹介もありました。一日を振り返り、今日の私は「架け橋となるケアが出来たのだろうか?」「患者さん・ご家族から、最期に合格通知がいただけるような関わりが出来たのだろうか?」真摯に振り返りながら日々の仕事を繋いでいきたいと感じました。今後も皆様と共に地域の方々を支えられるよう、一緒に学んでいきたいと思ひます。



教育講演

「在宅ホスピス医として現場をみつめて」